シンポジウム

学校と教職大学院との共同研究プロジェクト

小松　貴弘（京都教育大学）　竺沙　知章（京都教育大学）
徳永　俊太（京都教育大学）　水本　徳明（同志社女子大学）

１．シンポジウムの目的

本プロジェクトは，京都府，京都市の教育委員会，総合教育センターと連携しながら，京都府，京都市の学校の研究開発に教職大学院として関わり，学校の課題解決や革新的な授業研究などのプロジェクト研究を企画し，院生，教員が，当該学校の教職員とともに共同研究を行う「プロジェクト研究（仮称）」の授業モデルを開発しようとするものである。それは，教職大学院にとっては，院生の授業科目として，教員にとっては院生指導，研究活動として実施するとともに，連携する学校にとっては，校内研究として実施し，学校改善に取り組むことを目的としている。京都府南部地域の宇治田原町立宇治田原小学校，京都府北部地域の与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校，京都市立石田小学校，京都市立西陵中学校の４校と共同研究を行った。

本シンポジウムでは，各学校での取り組みを報告するとともに，その成果と課題について協議し，学校と教職大学院との新たな連携関係を構築するための課題を検討することを目的としている。

２．各学校の取り組みと校長の評価

（１）宇治田原町立宇治田原小学校

宇治田原小学校は，児童数 234 名，学級数 13，教職員 19 名の小規模の学校である。宇治田原小学校では，「学力向上推進に関する実践研究」をテーマとして，学力向上のための授業研究への参加，学力テスト結果の分析，補充学習の支援などに取り組むこととした。研究組織は，高桑詩乃（授業力高度化コース 1 回生，学部新卒），倉田実来（生徒指導力高度化コース 1 回生，学部新卒），　後藤裕樹，松岡里佳（以上，学校経営力高度化コース 1 回生，現職教員）と筆者である。宇治田原小学校は，後藤裕樹の現任校であり，派遣されている院生の現任校とどのような共同研究を行うことができるかを試みることをねらいとしている。

チーム全員で，あるいは一部のメンバーが学校を訪問したのは，計 11 回である。その他，大学においてチーム会議を計 8 回行った。

我々のチームがまず取り組んだことは，児童や教職員の観察と実態把握であった。朝学習や研究授業，校内研究の参観，チャレンジタイム（個別の補充学習）の参観と支援，学力状況調

査の分析，教員へのアンケートの実施と分析により，児童の様子や教員の様子を通じてその特徴を把握するとともに，アンケートの結果などを通じて教員の想いに触れることに努めた。

第二に，校内研修の企画と実施である。教員に対するアンケートの結果から，課題の捉え方や思いに多様性が見られたことから，グループ協議を企画し，院生がコーディネーターとなって，教員が日頃感じていること，困っていることなどを率直に語り合う機会を設けた（11 月 15 日）。そうした協議を踏まえて，今後の具体的な方策を話し合うことをねらいとして，2 回目のグループ協議の校内研修を実施した（2 月 14 日）。

第三に，学校の実態の分析や校内研修の実施を通じて感じたことを，管理職や中核となる教員に伝えるとともに，職員会議において全教職員に対して筆者より問題提起を行った。

以上のような取り組みを通じて，学校の重点研究や子どもの課題について，話し合う機会を提供することにより，教員の間で認識の共有化を図る必要性に関して，問題提起を行うことができた。

院生にとっての学びについては，学部新卒院生から，大学院の授業では得られない新たな気づきがあったこと，特に教員間の協働の重要性に気づいたこと，現場で求められる「実践力」を実感として理解することができたこと，現職教員院生からは，大学院での学びと関連付けながら，学校における中核教員の役割について理解を深めることができたこと，学校に戻った時に心がけたいことが見えてきて，職能成長を図ることができたこと，現任校である院生からは，勤務校を俯瞰的に見ることができ，日々の実践では見えていなかったことに気がつくことができたこと，他の院生との意見交換により多様な見方があることに気がついたことなどが述べられた。

学校との共同研究を進める中で，学校との連携関係を構築することの難しさを認識することができた。学校の現状認識の共有化をいかに図るか，そして授業改善，学校改善につながる方策をいかに実行していくか，具体的な取り組みを通じて成果を上げることにより，その課題に迫っていくことが必要である。

（2）与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校

本プロジェクトの研究課題は，特別活動を通した生徒のリーダーシップの育成についてであった。研究組織として，小松貴弘（本学教員），西垣淳平，前田寛樹（以上，生徒指導力高度化コース 2 回生，学部卒院生），角野晴彦，鎌野高信（以上，学校経営力高度化コース 1 回生，現職教員院生）の 5 名でチームを結成し，プロジェクトの進行について適宜協議を行った。橋立中学校は，生徒数約 260 名，1 学年 3 学級，教員数約 25 名（非常勤等を除く）で，府北部の著名な景勝地の近くに位置する学校である。平成 29 年 8 月下旬から 12 月にかけて，小松が学校を 7 回訪問し，プロジェクトの進め方や進行経過についての学校管理職との打ち合わせや，特別活動の様子の観察，関係する教員へのインタビュー調査などを行なった。また，平成 30 年 2 月には，西垣，前田の両院生と小松が，土曜活用事業として 1，2 年生を対象に行われた

特別授業を参観した。

本プロジェクトの成果と課題について見ていく。まず研究課題について。特別活動の観察や教員へのインタビュー調査を通じて，比較的平穏に見える生徒たちの日常的な姿を前にして，教員による生徒たちの内面理解，そして生徒たちを育てる方向性とそのための指導のあり方に関して，改善に向けた取り組みの余地があることが浮かび上がってきた。特別活動を通じて，そこに現れる生徒の姿をどのように理解し，何を目指してそこに働きかけていくかを，実践に即して省察し，協議する機会と場を確保していくことが課題であると考えられた。

2 点目に院生の学びについて。特別授業の取り組みを参観する中で，活動の中での生徒同士の関わりの様子の観察や，教員の指示や声掛けに対する生徒の反応の様子の観察から，院生には，教職大学院でのこれまでの学びから得られた知見ともつながる，いくつかの気づきが得られた。他方で，本プロジェクトは大学から遠隔地にある学校との共同プロジェクトであることから，院生が継続的に学校訪問を重ねることには一定の限界があった。

3 点目に大学教員としての関わり方について。特別活動の様子を参観する中で，生徒同士の関わりの機微が，それを目にしている教員には自覚的にはキャッチされていないように思われる場面に出会うことが何度かあった。そうした経験から，学校内の生徒たちの日常の中でも，教員の感覚と理解とが自覚的には届いていない部分が多々あるのではないかと考えられた。一方で，そのような場面について，その場にいた教員と後で話し合う機会を作ることは十分にできなかったことが反省点として残った。

4 点目に学校と教職大学院の協働について。学校が抱いている課題意識を，異なる専門性を備えた研究者の観点から観察検討することで，より立体的に描き出すことができたと思われる。その課題意識を，学校全体で共有し，具体的な取り組みにつなげていくうえで，教職大学院が学校とどのような関わりを作っていき，どのような役割を果たせるかに関しては，これからの課題として模索する必要がある。

（3）京都市立石田小学校

1）活動の概要

京都市立石田小学校とのプロジェクト研究は，学部卒院生の専門性向上を主たる目的にして，彼らが活動の主体となるようにして取り組まれた。活動に参加したのは，授業力高度化コースの徳永ゼミに所属する学部卒院生7名（宇野和貴，竹内佑太，坪田匡司，濵拓真，濵村瞳，向山尊次，山本賀奈子）と現職院生1名（宮本知佳），学校経営力高度化コースの現職院生2名（河村健太，花谷大介）である。学校経営力高度化コースの院生にはメンターとしての役割を担ってもらい，可能な限り学部卒院生の主体性を尊重してもらうようにした。この院生集団を2名の教員（徳永俊太，林明宏）がサポートする体制をとった。

2）院生による活動の構成

石田小学校とは，「石田小学校の子どもの学びを豊かにする」という大くくりな目標を共有し，

上原みゆき校長に学校の要望を集約してもらって，それに院生の小集団が応えるという形を取った。その中で院生の主体的な活動につながる可能性を持つことになったのは，土曜学習の取り組みである。

土曜学習では，理科を専門とする院生を中心に，様々な理科実験を子どもに体験してもらう活動を組織した。現職院生がサポートを行ってくれたことで，学部卒院生は自分のアイディアをある程度尊重してもらいながら，活動に取り組むことができた。2月17日に行った土曜学習では，教科を拡充し，英語・国語，算数，理科の三つの活動を院生自身が考案し，実施した。土曜学習は子どもたちにも好評であり，学部卒院生が主体となりながら，「石田小学校の子どもの学びを豊かにする」という目標は達成することができたと考えられる。

3）プロジェクト研究の意義

学部卒院生にとって，このようなプロジェクト研究に参加する意味はどこにあるのだろうか。教職専門実習との比較で考えてみると，教職専門実習が個人の力量を問われる場合が多いのに対して，プロジェクト研究では院生集団としての力量が問われる場合が多い。一人では十分にこなせないことでも，現職院生や他の院生の助けを借りれば，できるようになる場合もある。そのような活動を経ていけば，やがては学部卒院生一人でも同様のことができるようになるのではないだろうか。こうした集団の中で個人の力量を伸ばしていけることが，学部卒院生がプロジェクト研究に参加する意義である。

一方で，活動を通して課題も見えてきた。ここでは2点を挙げておきたい。まずは院生の日常生活との折り合いという問題である。教職大学院の院生はこなさなければならないことが多くあり，プロジェクト研究のための時間を十分に捻出することが難しかった。もう一つは集団の学びの継承という問題である。院生が主体となって活動を継続していくのであれば，昨年度の研究参加者がリーダーシップを取り，新たな参入者にこれまでの経験や研究成果を伝えていくことが望ましい。しかし，新たな参入者への伝達が行われるべき前期（4月～8月）は，教職専門実習の時期であり，上の学年が不在となっている。研究の蓄積を有効に利用できるようにする方法を考察することが今後必要となる。

（4）京都市立西陵中学校

1）研究活動の概要

研究組織として，水本徳明（本研究科教員），井上英雄，上良祐子（以上，学校経営力高度化コース1回生，現職教員院生）の3名でチームを結成し，校長と相談の上「授業改善を促進する組織文化に関する研究」をテーマに研究を進めることとした。

西陵中学校は，ニュータウンの開発とともに開校して 37 年目の学校であり，生徒数減少が進んでいる。2017 年度から数学教育で国立教育政策研究所の研究指定を受けて研究を進めている。2017 年度の生徒数は 217 名，全 9 学級（育成学級 2 を含む），教員数 19 名である。研究活動の概要は表のとおりである。学校で行われる校内研修，研究授業と協議，小中合同研修会

のフィールドワークのほか，校長に対してインタビューを実施して学校経営に対する基本的な考え方の聞き取りを行った。その間，研究チームで観察結果等の検討を行って，最終的に学校に対する提言をまとめて，校長に報告した。

２）研究の成果と課題

西陵中学校の研修では年間の計画が適切に設定され，研修会では担当の教員から適切な知識と情報の提供が行われていた。また，教員は前向きな姿勢で取り組み，教科を超えた授業研究が行われていた。

一方課題としては，研修会において発言者の偏りやリーダーに対するフォロー，変革的な雰囲気などの組織文化面でチームによる差がみられた。その要因として，ファシリテーションについての認識や技能の差があると思われる。また，小中連携，授業改善，数学教育，道徳教育など研修・研究課題が錯綜し，研修が十分に体系化あるいは焦点化されていないことも背景的な要因である。こうした点は，多くの中学校に共通する課題だと思われる。

以上の分析に基づいて，ファシリテーションスキルの向上等を通じた組織文化の改善が課題であることを指摘した。そのための具体的な取り組みとして，教職員の願いを表出し，共有するワークショップを開催することを提言した。また，さらなる授業改善のために，よい授業に触れる，授業改善のアイディアをインプットするための学習機会をつくることも提言した。

研究の課題は，①継続的なかかわりではなく，単発的な観察にとどまった，②提言を実践してさらなる改善につなげるアクションリサーチ的な取り組みができなかった，という２点である。

３）教職大学院における学習の成果と課題

研究に参加した現職院生にとっては，学校の日常的な取り組みを俯瞰しリフレクションする機会となった。とりわけ，具体的な提言を考えることは，観察して実態を意味づけることにつながった。

現職院生の場合，大学院は，学校現場から切り離されたから意味のある１年でもある。学校現場から離れることが大学院の意義でもある。すぐに共同研究に関わると，現場の感覚に戻される。だとすると，観察くらいがちょうどよいのかもしれない。今回は８月から共同研究が始まったが，大学院に入ってすぐに学校との共同研究に関わると俯瞰できない。修了してからが実習だと考えると，修了後の様子を次年度の院生が観察するのはよいと思われる。修了してから大学院とつながるのがよいという考え方もある。

（５）校長の評価

いずれの校長からも本プロジェクトに対して肯定的な評価を得ることができた。宇治田原小学校の校長からは，教職員が刺激を受け，意識改革につながり，学校の課題を洗い直し，改革に取り組もうという方向付け与えられた，橋立中学校の校長からは，小松教授が異質の同行者として関わってくれたことがありがたかったこと，学校の日々の実践について研究者が読み解

いたことを還元してくれることがありがたいこと，石田小学校の校長からは，院生による教育環境の整備，子どもの体験学習の指導を通じて，学習意欲を高めるなど，主として学部新卒院生が子どもに良い刺激，影響を与えたこと，西陵中学校の校長からは，学校の課題に関する分析，整理をしてもらったことが非常に示唆的であったこと，校長自身の自己分析の機会にもなったことなどが語られた。ぞしていずれの校長からも次年度の要望，希望も提起された。

３．全体討議

指定討論者の大脇康弘教授からは，たいへん刺激的で，興味深いという感想が述べられると共に，各学校の課題を分析し，それを具体的な活動に結びつけている点を評価する指摘がなされた。その上で，このプロジェクトを教職専門実習や修了論文の作成といったカリキュラムとの関係を考えると，両者の調整は単純に進めることは難しく，整理しなければならないことが多々あるのではないかという課題の提起もなされた。

フロアからの質問，感想もいくつかなされた。他の教職大学院関係者からは，学校と教職大学院との関係づくりの難しさが述べられ，その見解が求められた。これに対しては，負担感を感じることはあっても，しっかりと目標を掲げて挑戦していくことが必要であるといったことや，在学している院生だけではなく，修了後も継続して取り組むという関係を作り，ラーニングコミュニティと呼べるようなつながりを作っていくという発想も必要であるといった見解が示された。フロアの修了生から，ぜひ自分の勤務校でやってみたいという発言も出され，今後の発展を期待できる見通しを持つこともできた。フロアの本研究科の教員からも，次年度以降の取り組みについての問題提起もなされ，今後の展望も考える機会となった。

時間の関係で十分な協議の時間を確保できなかったのは残念であったが，教職大学院に期待される役割を見据えて，学校との連携をさらに密にして，新たな取り組みを進めていく決意を新たにするシンポジウムになったと言える。

※執筆の担当は，小松：2（2），竺沙：1，2（1），（5），3，徳永：2（3），水本：2（4）である。